
ミラージュ・ワールド（1） 幻想のアリス

姫反 アロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラージュ・ワールド（1） 幻想のアリス

【Zコード】

Z2282H

【作者名】

姫反 アロ

【あらすじ】

ミラージュワールド。実際に存在するフィールド、常に死と隣り合わせのゲーム。お小遣い稼ぎにモンスターを倒していくユウトはある日一人の少女に会う。彼女達にゲームクリアを目指すギルド『月姫の剣』のメンバーになって欲しいと頼まれるが、ユウトには命を大切にしなければ行けない理由があった。

まえがき

こんにちわ。姫反アロです
今作「//ラージュワールド（1）幻想のアリス」は、名前が指し
示す通り、シリーズ物です。
前作は完結させることができましたが、今作の目標は、実力UP
です。
すこしでも楽しんでいただける作品を作りつゝ想っています。
もしよろしければ連載を見守ってください。

一週間に1章のペースでの更新を目標にしたいと思っています。
では、「//ラージュワールド」をよろしくお願いします。

09／6／22（月）姫反アロ／Rain Coat

携帯での縦書き観覧

携帯で縦書き観覧する場合は、文字を小さめに設定し、画面サイ
ズは携帯の画面に入る範囲でなるべく大きくすることをお勧めしま
す。

1・ミラージュワールド（1）

月光が矢を照らした。だがそれも一瞬。次の瞬間には矢は狼の目を貫いていた。

「 ッ！

狼は悲鳴を上げながら、消滅した。

「ふう……」

ユウトは『』を下ろし、一息ついた。

ウルフタイプのモンスターは、その素早さ故厄介なモンスターだが、落ち着いて正確な攻撃を繰り出せば楽に倒せる。

事実、ユウトはスキルを使わず、三本の矢のみで倒した。頭上にあるHPゲージは1ミリたりとも減少していない。

ユウトが空中を指差すと、指先に縦20センチ横30センチ程の半透明なウィンドウが出現した。

「経験値は……10……か」

ウィンドウにはウルフを倒したことで得られた経験地と獲得デイ

ルが表示されている。

デイルというのはこの世界の通貨単位のことだ、1デイルを1円に換金することが出来る。

獲得デイルは65。円に換金してもチョコボールを買うには10程足りない。値上げ前なら買えたなど、不況な世の中を再認識する。ウィンドウを閉じ、次の獲物を探そつと歩き出したとき、突然悲鳴が鳴り響いた。

モンスターのものではない。人、それも女の子のものだ。

「何だ！？」

悲鳴はおそらく校舎裏の中庭の方から聞こえた。

ユウトは全速力で走り出す。

5秒ほどで裏庭に辿り着く。まず田にはいったのは、地面に倒れこむ少女。そして、その数メートル前に立つヒト型モンスター、狼男。

ウルフマンは手に持ったこん棒を今にも倒れている少女に振り下ろそうとしている。

「させるかっ！」

コウトは半秒で弓を構え、矢を放った。

矢は狼男に向かつてまっすぐ飛び、その腹に命中する。狼男の頭上に一瞬HPゲージが見え、全体の10分の1ほど減少する。

狼男は、眼下の敵を認識し、少女を飛び越え、コウトに向かつて跳んできた。

「強化結晶、炎！」

コウトがそう叫ぶと、弓が一瞬ほのかに赤く光った。

弓を引き、飛び出した矢は半秒後、炎に包まれた。

「！！！！！」

狼男は、顔に炎の矢を喰らい、声にならない悲鳴をあげる。コウトはさらに連続で2本の矢を放った。

2本の矢は立ち止まっている狼男に命中し、HPゲージの残りを奪い去る。

「！」

一瞬の叫びとともに狼男は消滅した。

コウトが「武装解除」と言うと、その手から弓が消えた。

コウトは倒れている少女に歩み寄り、手を差し伸べた。

「」

瞬きもせず、ただ視線をコウトに向ける少女。

中学生だろうか。中学一年生くらいと思われる幼い容姿。長い髪は細く真っ直ぐで、肌は真っ白。例えるなら、雛人形のような髪にフランス人形のような肌と言つたところだらう。

それから数秒後、無言のまま、コウトの手を握る少女。コウトはその小さな手をしっかりと握つて引っ張りあげた。

「あの……ありがとうございます」

少女が小さな声で言った。

「うん。いいけど、君『プレーヤー』?」

最悪、モンスターといふこともあるとユウトは考えた。ここまで可愛い子だと逆にモンスターの罠といふことも考えられたからだ。

「……」

黙り込む少女。

と、突然後ろから、足音がした。

「アリス！」

すこし茶色かかったロングヘアを揺らしながら、走り寄つて来る一人の少女。

「ハルカ」

と、ユウトが助けた少女が、呟いた。

「アリス大丈夫?！」

ユウトが助けた少女 アリスと呼ばれた少女は、こくんと頷いた。

それを聞いて、安心したのか、一息つく少女。と、その少女はユウトに視線を移した。

「あなたが……助けてくれたの?」

少女の問い。それにユウトが答える前に、アリスが「そうだよ」と言った。

少女は一瞬の後、「ありがとう」と礼の言葉を口にした。

「わたしはハルカ。ギルド『月姫の剣』のメンバーよ」

「……ユウト、ギルドには所属していない」

この世界の挨拶を交わすユウト。

「良かった。探してたの」

と、ハルカが無言のまま言った

「……俺を?」

「さうよ。じ地区で唯一レベル20以上のプレーヤーである貴方を」

「どうこうこと?」

「そのままよ。単刀直入に言つわ。わたし達『月姫の剣』のメンバ
ーになつて欲しい」

III ラージュワールド（2）

月姫の剣。

噂を耳にしたことはある。

メンバーは四人の少人数ギルドで、リーダーはレベル25、他三人も20以上。メンバーの平均レベルは間違いなくトップクラスだろ？

「……」

黙りこむユウト。

他のほとんどプレーヤーなら、入るかどうかは別として喜ぶはずだ。月姫の剣に誘われたと他人に自慢できるだらう。

だが、ユウトの場合は違つた。

まずその名譽にはあまり興味がない。

そして、なにより大事なこと。

「月姫の剣の目的はゲームクリア。そう聞いたけど、どうなの？」

「そうよ」

即答するハルカ。

「悪いが、俺は遠慮する」

「何で？」

ハルカはすこし声を荒らげて言った。

「ダンジョンの攻略に参加する気は無い」

ユウトは、それだけ言って立ち去ろうとした。

「ちょっと！」

ユウトの腕を掴む少女。

「……離してくれ」

「何で！？ あなたは強い。なのに何で協力してくれないのよー！」

ハルカの声はだんだんと大きくなつていった。

「悪いけど、死ぬ危険は冒せない」

「ウトはハルカの手を無理やり振り払つて、走り出した。

：

『ミラージュワールド。』

多人数同時参加型オンラインRPGのことを『MMO』と言つが、ミラージュワールドはそれに似ている。

あえてジャンルわけするなら、MMAWRPG 多人数参加型異世界ロールプレイングゲーム。

そう。

ミラージュワールドの舞台は、インターネットという仮想空間ではなく、現実に存在する異世界なのだ。

プレーヤーは『ログイン』して、『ミラージュワールド』という異世界に飛び、そこで剣や魔法を駆使して戦う。

各プレーヤーには『ステータス』というものがあり、それがミラージュワールドにおける能力となる。

そのステータスの中には『HP』というものがあるが、それは普通のRPGのそれとは少し異なる。普通のRPGではHPが無くなつた時点でゲームオーバーだが、ミラージュワールドの中では、そうではない。HPとは、体を覆うバリアの耐久値のことだ、HPがゼロになるとということはバリアがなくなるということを意味する。バリアがあるうちは、首を斬られても、爆発を浴びたとしても、体は一切傷つかない。だが、HPが無くなつてしまえば、バリアは消え、斬られれば血が出て、爆発を受ければ大火傷する。

当然、死という概念が存在する。

HPがゼロになつた後攻撃を受け、心臓が止まれば、ゲームオーバーである。

このゲームオーバーが一体何を意味しているかはわかつていない。故にこれがゲームオーバー＝現実世界での死という可能性も考えられるのだ。

これが、優斗が積極的にゲームに参加することを拒む理由だった。死ぬ危険を冒してまで、強いモンスターと戦うなど論外だ。

あくまで、弱いモンスターを倒してお小遣いを稼ぐだけが目的なのだ。

だが、積極的にモンスターを倒す人が必要なのも事実だ。

ガイドによれば、ミラージュワールド内でモンスターが増えると、現実世界にもモンスターが現われ、人を襲うらしいのだ。

そして、定期的に『ダンジョン』というものが現われる。各ダンジョンはにボスが居て、これを倒すと、そのダンジョンは攻略されたことになる。

そして問題は、ダンジョンがある間はモンスターが増殖することだ。つまり、長期間ダンジョンを放置すれば、現実世界が危険にさらされるということだ。

そして、全ダンジョンを攻略すると、ゲームクリアとなるらしい。月姫の剣が目指すのはこれだ。

だが、ダンジョンがいくつあるのかは分かつておらず、一体何時最後のダンジョンが現われるのか分からぬ。

つまり片っ端からダンジョン攻略をしていくしかないのだ。

現在確認されているダンジョンは、レベル1と2。どれも大部屋にレベル10~20のボスが居るだけのシンプルなものだ。

今後、レベルはどんどん上がっていくだろう。

2・大切なものの（1）

翌日。

帰りは部活で遅くなるので、朝のうちにコンビニに寄るつてから登校した。

「よお、優斗」

そう声を掛けて来たのは級友であり旧友の長谷川真人だ。

「おはよう」

優斗は、返事をしてから、席に着いた。

「……そのビニール袋……また『土産』か？」

机の横に掛けたビニール袋を指差す真人。

「まあな」

「お前も家族思いだね……」

しみじみとそういう真人。

「真人……言い方がオジサン臭い」

「悪かつたな！」

真人が席に勢い良く座りながら言った。

それからすぐ、授業開始を告げるチャイムが鳴り響く。

優斗はそれを聞いて、教科書を机の上に広げた。

…

教室に戻ると、真人が慌てて近寄ってきた。

「ど、どうしたんだよ？」

「お前！ てつきりブラコンかと思つてたのに…」

「…は？」

「今さつき中北先輩が来て、『中庭で待つてるつて』って…」

「中北？」

中北先輩。優斗も名前だけは聞いたことがあった。3年生のアイドル的存在で、2年生の間でも有名な先輩だった。

「アイドルと言われるだけ合って、かなり可愛いらしい」というても優斗は実際に見たことが無かつたが。

「そうだよ。あの中北先輩だ」

「それ本当に俺への伝言?」

「勿論だ! はつきりそう言つたぞ。とにかく早く行けよ。そしてちゃんと俺に報告しろ、いいな」

そんな真人に押されて、優斗は訳も分からず教室を後にした。

⋮

中庭を見ると、そこに一人の女子生徒を発見した。

その女子生徒は、腕を組み、壁に寄りかかって、右足のつま先を地面に着けたり降ろしたりしている。

その顔には見覚えがある。

間違いなく、昨日優斗をギルドに勧誘した晴佳だった。と、晴佳が優斗に気がつき、歩み寄つてくる。

「…………あ」

すると 中北先輩ってのはコイツのことだったのか。

確かに、昨日見たときも可愛いとは思つたが、まさか3年のアイドルだとは思わなかつた。

「言いたいことは分かるよね? あたし達の仲間になつて」

「……用はそれだけですか?」

優斗は冷たくそう言い放つた。

晴佳はその細い眉毛を寄せ、それからグイッと一歩足を踏み出した。

「何で!? C地区でレベル20越えしてるのは、あなただけなの

よー」

「…………それがどうしたんですか?」

「どうって！ あなたは強い。だつたら世界のために戦おうって気
は起こらないの？」

ますます声を荒らげる晴佳。

「いいえ。自分の命が大切ですから」「
なつ……」

「それじゃあ、失礼します先輩」

そう言つて優斗はその場を後にした。

大切なものの（2）

「で、どうだつた？　まさか告白！？」

「真人、声が大きい。違つて。単にお礼を言われたんだ。昨日先輩の落し物を届けたから」

「……本当か？　普通わざわざ中庭に呼び出したりするか？」

「さあな。でも先輩はたまたまそうしただけでしょ」

説明するも、真人は納得してはくれなかつた。

：

放課後、弓道場を後にして、校門を出る。

すると、そこには晴佳の姿があつた。

優斗は黙つてその横を通り過ぎようとしたが、その前に晴佳に止められた。

「ちょっと待ちなさいよ！」

「離してくれ。何度も言つても答えはノーだ！」

「女の子が頼んでるのよー。女の子の頼み事も聞けないなんて、あんたそれでも男？　本当にアレ付いてんの！？」

そんな美少女にあるまじき罵声が跳ぶ。

「男が絶対に女の言つことを聞かないといけないってんなら、男は女の奴隸になつてるだろうが！」

思いつきり腕を負つて、晴佳の手を振り払つ。そのまま優斗は駆け出した。

：

「ただいま

そう言つてリビングのドアを開けると、叔母さんが「お帰り」と料理テーブルにを並べながら言つた。

そして、2階から勢い良く下りてくる足音。

「兄ちゃん！　お帰り！」

飛びついてくる人影。

「おう、タクト。ただいま」

拓斗　優斗の唯一の肉親だった。

「ほら、今日はチョコボール買って来たぞ」

優斗は、鞄から『お土産』を取り出して拓斗に手渡す。

「ありがとう！　兄ちゃん」

それを聞いて、笑顔になる優斗。

「おう。で、小学校は何かあつたか？」

「うん。ええつと、ね。足し算習つたんだ。お兄ちゃん、1足ずつはなんだか分かる？」

「拓斗は分かるのか？」

「うん。1足ずつは6！」

「はは。頭がいいな。拓斗は」

拓斗の頭を撫でる。すると、拓斗は報告を再開した。

「それとね。今日すごいものみたんだ

「すごいもの？」

「うん。校舎の裏の森にね、赤い目をした狼が居たんだ！」

「……なんだって？」

叔母さんが「変な」と言つてしまふと、多分犬を見間違えたのね」と笑つた。

「ホントだもん！　今日だけじゃなくて昨日も見たんだから！　口ウキくんも見たって！」

「拓斗、本当か？」

「うん！　図鑑で見たのとそっくりだった」

赤い目をした狼……それってミラージュワールドの狼じゃないか。

普通の狼は赤い目なんてしてない。それに日本ではもう絶滅してる。

つてことは拓斗が見たのはモンスターつてことか？

…

夕食を手つ取り早く済ませ、叔母さんに『ランニングしてくる』とだけ言つて外に出た。

ミラージュワールドにログインするときはいつもわざわざ家を出しているので、叔母さんも「気を付けてね」としか言わなかつた。優斗は家から五分の距離にある学校に向けて走り出した。

すぐに、校門に辿り着く。

まだ校舎にはいくつかの明かりが残つているので、静かに、けれど素早く構内に入った。

弟が言つていた森、といつのは校庭の端っこにある林のことだろう。

「暗くてよく見えないな……」

林に近づいていく。

突然。がさつと音がした。慌てて、音がした方を見る。

「！」

拓斗の言つていることは正しかつた。

そこには赤色の目をした狼、間違いなくミラージュワールドのウルフだつた。

「ログイン プレーヤーネーム、ユウト」

そう言つた次の瞬間、現実世界の優斗の体が消えた。

大切なものの（3）

：

ログインすると、ミラージュワールドのセーブポイントに現れる。現実世界からログインするときは、どこからでも可能だが、逆にミラージュワールドからログアウトするときは、基本的にセーブポイントに戻らなくてはいけない。

つまり、モンスターにやられそうになつたからと言って、すぐに現実世界に逃げるというのは不可能なのだ。

コウトは△地区の北の方のセーブポイントに姿を現した。地区というのは、フィールドの場所の表し方で、現在△地区から△地区までが確認されている。

ミラージュワールドのフィールドは、現実世界の街の外見を模しており、『ミラーワールド』という言葉がふさわしい。ただし、すべての場所がフィールドになつていてるわけではない。例えば、同じ街の中でも、北はフィールドになつっていても、南はそうではないという場合もある。

コウトの服装は、高校の制服ではなく、白いシャツに赤み掛かった黒いズボンというに変わつていた。一見するとただの私服だが、防御力を備えた『装備』である。

さつき見たのが本当にモンスターのウルフなら、現実世界の小学校とリンクしているこのあたりのフィールドにウルフトタイプのモンスターが居るはずだ。

白い光りを放つセーブポイントから足を踏み出す。

周りを見渡すと、学校の形をしたの建物が目にはいる。
そこに向かつて駆け出した。

：

最初の鳴き声が聞こえたのは、学校の敷地内に入つてすぐのことだつた。

それと同時に、『』を取り出して、構えるユウト。

「グア！」

短く吼え、横から狼が走つてくる。ユウトは、それに向かつて性格に矢を放つた。命中し、狼のHPゲージを2分の1以上減らす。大きく後ろに飛び、さらに矢を放つ。「ア！！！」と短い断末魔をあげたあと、狼は消え去つた。

だが休む間もなく、校舎の影から同時に2匹の狼が飛び出していく。

ユウトは素早く矢を放つ。矢はクリティカルヒットし、狼のHPゲージをゼロにしたが、それと同時に、もう一匹が飛び掛ってきた。迎撃は無理と判断し、狼が飛び上がった直後に、横に大きく跳んだ。

着地と同時に矢を連続で引いて放つ。2本の矢で狼が光りになつて消滅する。

完全にそつちに気を取られていた。だから、後ろからこん棒を振りかざしてくる狼男に気がつかなかつた。

「！」

咄嗟に目を瞑る、だかその前に、少女の声が響き渡つた。

「ブレイズエンド！」

炎の弾は勢い良く狼男にあたり、その体を吹き飛ばした。

ブレイズエンド 炎系魔術の奥義だ。

ユウトは呆然と、狼男が炎に包まれながら光に代わるのを見つめていた。

そこに声の主が歩み寄つてきた。

「ハルカ」

声の主は、ハルカだつた。

「強化結晶使つたんだから感謝しなさいよね」

：

「何で……お前がここにいる？」

「お前つて呼び方止めてよ。ハルカ。ちゃんと名前で呼びなさい」
そう言われて、ようやく我に帰った。

「……先輩。助けてくれたことには礼を言います。助かりました」

「そう」

「でも、先に言つておきます。俺の考えは変わりません」

「」

ハルカの透き通った目に見つめられると、思わず「ハイ」と言つてしまいそうだ。

「ふーん。まだ言つんだ。でも分かったでしょ？ 無関係じゃないのよ。あなたの弟さんが危険に晒されるわ」

「……」

言われずとも理解していた。

だが 次の言葉はまったく予想外だつた。

「C地区に『ダンジョン』が現れたわ」

彼女は冷静に、しかしあつさりと事実を告げた。

3・アリスの真実（1）

「ダンジョン……それはホントですか？」

その問いに答えたのはハルカではなく、別の声だった。

「本当よ」

幼く澄み切った声。歩み寄つてくる少女。

昨夜コウトが助けた少女 アリスだった。

「この田でしつかりと確認した。間違いないわ。分かってるんじよ？ もう無関係じやないわよ。放つて置けば、いずれ小学校にモンスターが現れ、あなたの大事な弟さんを襲うわ」

「……」

コウトは、拓斗が襲われる場面を想像してしまった。

「ふざけるな！……あんた達が攻略するんだろ？ なら問題ない」「しないわよ」

ハルカが冷たく想言い放つた。

「……なんだつて？」

「あなたは弟を守りたいんでしょ？ ならあたし達の仲間になれば良い」

「……質問に答えてない。どうして攻略しないんだ？」

「……この手段は取りたくないけど、あなたの気持ちを変えるためよ」

「何故俺なんだ？ ちょっと強いだけだ。他でも良いだろ？」

「あたしも知らないわ。兄さんの命令なのよ」

「兄さん？」

「ええ、ギルドのリーダーよ」

「なら、伝えてくれ。俺は弟を守ることで精一杯だと」

「……ならあたし達の仲間になれば良い。そうすれば弟を守れる。

良い？ この先モンスターが増えれば、弟が何時までも安全だという保証は無いのよ？」

「どういふことだ？ あんた達が倒してくれればそれで解決じゃないか」

「知ってる？ ダンジョンにはレベルがあるの。現在確認してるのはレベル1と2。これ何を意味するか分かる？ だんだん難しくなつていくのよ。いつか攻略できないダンジョンが現れれば現実世界が襲われる」

「……だけど俺がやる必要は」

「そうね。他のヒトでも良いわ。でもあなたは弟の安全を他人に任せせるの？」

「それは……」

「他人に任せるのは、自分が強くなつて守るほうが確実だと思つけど」

そう言い放つて、ハルカは踵を返した。

「明日夜7時。ダンジョンの入り口で待つているわ」

そういうつて、ハルカはセーブポイントに向かつていった。

⋮

取り残されたユウトとアリスは、近くのベンチに座つた。

「調べたんだ。ユウト君のこと」

隣に座るアリスが喋りだした。

「両親が居ないユウトにとつては弟さんが唯一の肉親だもんね」

「……君は何でプレーヤーをやってるんだ？ 危険を冒してまで」
隣に座る少女。どうみてもユウトより幼い。それが、何故ゲームクリアのために命を掛けているのかが分からなかつた。

「……他にすることが無いから。私は……この世界から出られないんだ」

「なんだつて？」

「この世界から出られない。……意味が分からない。

「あたしは偽者。本当のアリスは、もうずっと眠つたままなんだ。

病院のベッドで

「そんな馬鹿な……体が動かないのに、どうしてここにいるんだ？」

「私は、まだアリスが動いてこの世界に居たときの、『残りかす』みたいなものなの」

「それじゃあ君は……」

「ええ。私はNPCじてこと」

アリスは悲しそうに言つた。

NPC ノンプレーヤーキャラクター。

「私は偽者なんだよ。いつもここに存在している私は偽者。どんなに楽しいと思つても悲しいと思つても、笑つても、泣いても。私は偽者なの」

なんと声を掛ければ良い。そんなのって無いじゃないか。

「偽者だから、他にやることなんて無いんだ」

…

優斗はアリスに慰めの言葉を掛けることは出来ず、ただ『明日まで考える』とだけ言つてミラージュワールドを後にした。

自分が偽者 それはどんな気持ちだろうか。

ミラージュワールドのNPC、例えばアイテムショップの男。彼は自分がNPCだとことを自覚はしているが、それについて考えてはない。ただ、店員という役目を貰えられ、その範囲内で動くだけだ。

だがアリスは違う。

彼女には喜怒哀楽がある。だけど、結局アリスはアリスの偽者でしかない。

それを自覚しているなんて 倘なら耐えられない。

結局、優斗が眠りに付いたのは、新聞がポストに入れられるところ
だった。

アリスの真実（2）

：

起きると、時計は既に10時を指していた。

学校は当の昔に始まり、もう2時間目が始まっている頃だらう。叔母さんは今朝早くに友達と小旅行に出かけて行った。

「サボるか……」

どうせ叔母さんが帰ってくるのは明日だ。叔父さんは最近プロジェクトの終盤に入つたらしく、一週間のうち半分以上を会社で寝泊りしている。だから、明日までは一人だ。後で適当に一日気持ち悪くて、学校を休んだと言つてもばれることは無いだろう。コウトは起き上がって、パンを焼き始めた。

ダンジョンの入り口で待つてるから

晴佳の言葉が蘇る。

他人に任せるのは、自分が強くなつて守るまつが確實だと思うけど

確かに、他人に拓斗の安全を任せるくらいなら、自分で守る。だが、冷静に考えれば、それがそのまま月姫の剣に入ることにはならない。

そうだ　自分が強くなれば良いじゃないか。

それで十分だ。

強くなつて、拓斗を守る。それで良いんだ。

：

時計は六時半を指していた。

「そろそろ行くか……」

優斗は、家の外に出て、マーティンワールドにログインした。

：

ログインしてすぐ、メニューを開く。

セーブポイントに居るときのみ選択可能なコマンド、『転移』を選ぶ。すると、選択可能な転移先の一覧表が現れる。その中にある『C地区ダンジョン』を選択する。次の瞬間、コウトは、薄暗いフィールドに転移した。

ダンジョンというのを見るのは始めてだ。今までC地区にダンジョンが現れたことは無かつた。

ここがダンジョンの入り口。

縦横10メートル程の円盤が闇の空間に浮いている。その円の中に一つの転移ポイントがある。一つはセーブポイントと繋がっているコウトが通ったポイント、もう一つはおそらくダンジョンと繋がっているのだろう。

コウトがしばらく観察していると、転移ポイントが光った。

「……決心は出来た?」

ハルカだ。

「……ええ

「そう

すこし笑みを浮かべながら、ハルカが満足そうに言った。

「待て。まずはつきり言言います。俺は月姫の剣に入る気はありません

せん

「……まだそんなこと言つてんの?」

「ああ。ダンジョン攻略には参加する。協力が必要だというのなら協力はします。だけど、ギルドに入るかどうかは別問題です」

「……そう。分かったわ。今のところは、そういうことにじとくわ

「ああ」

「じゃあ、早速行きましょうか？」

ハルカがメニューを開いて、槍杖を取り出した。
ユウトも、弓を取り出す。それから、ショートカットに強化結晶
を三つセットする。

「準備は良い？ それじゃあ行くわよ 転移」

ハルカに続いてユウトも転移を喰く。

「転移」

半秒後、2人はダンジョンに立っていた。

4・初めての共同戦線（1）

ダンジョンは、体育館のようだつた。長方形で、外壁はコンクリートのような場所に囲まれた完全な密室。

その中央にソイツは居た。

「あれが……ボス」

ボスはタートルタイプのモンスターだつた。

ただ今までに見たことの無い大きさ。タートルモンスターは一番小さいものでも数メートルの大きさがあるが、コイツはそんなモンじゃない。

パツと見たところ、縦10メートル、横5メートル、高さ3メートルぐらいだろうか。甲羅は黒い色で、本体は濃い灰色。目は黒み掛かった赤色。二人とも、こんなタートルモンスターは見たことが無かつた。

ユウトはメニューからアイテム『スペクタクル』を使う。
「ブラック・リーダ・タートル 黒長亀 レベル20」「レベル20……」

今まで倒してきた雑魚モンスターとは格が違う。

安全に戦うには、戦うモンスターのレベルを5以上は上回つていいのが理想だ。だが、ユウトもハルカも共にレベル20。相手と同格。それはつまりどっちが勝つか分からないということだ。

救いなのは、相手がタートルタイプだつたことだ。タートルタイプの攻撃はあまり脅威ではない。油断しなければ攻撃を喰らうことが無いからだ。いくら防御力が高くても、少しづつダメージを与えれば何時かは倒せる。

「さて、行きますか」

ハルカが槍杖を構えた。

「ああ」

ハルカが走り出すと同時に、彼女の槍杖が光りだす。黒長亀の数

メートル前まで近づくと、飛び上がった。

「スキル、ブレイズ・ブレイド」

ブレイズブレイド 杖から剣の形をした炎を飛ばす、炎系の中

距離攻撃スキル。

それは黒長亀の頭を狙つて放たれたが、黒長亀は咄嗟に首を引っ込めた。

コウトは弓を構え、背中の甲羅の中心に向かつて矢を放つた。バキッと、矢が折れる音。HPゲージは少しも減っていない。

「強化結晶、炎」

コウトは強化結晶を取り出して、弓矢の前で碎いた。一瞬赤色に光る。「そして炎の矢を亀の足に撃つた。

「足を狙つても、ダメージこんだけ？」

ハルカが悪態をつく。

黒長亀も黙つていいる気は無いらしく、こちらに向かつて歩き出した。そのスピードは予想に反して速い。ただし普通の亀に比べれば。だが そんなことを問題ではなかった。

「先輩！ 攻撃来ます！」

亀が頭を出す 遠距離攻撃の合図だらうと察したコウトは、そのままの口に向かつて矢を撃つた。

だが矢が届く前に、青い塊が黒長亀の口から放たれる。それは矢を飲み込み、ハルカに向かつて跳ぶ。

ハルカは至近距離に居たため、完全に避けることが出来なかつた。その腕に水弾が命中する。

「ああっ！！！」

悲鳴を上げるハルカ。HPを4分の1程削り取られていた。

普通の水弾は喰らつてもほとんどダメージを受けない。水など生身で当たつても痛くないのだから当たり前だ。

だが上位の敵になると、その水の中では水が校則で流動し、ドリルのようになる。結果ダメージは、氷弾よりも大きくなるのだ。

コウトは、他のプレーヤーが、そんなことを言つていたのを思い

出した。

「先輩！ 下がつて回復してください！」

そう言つと先輩が後退し始めた。それと入れ替わるよつて黒長龜に駆け寄るユウト。

「武装解除、弓。武装、クレイモア」

弓を仕舞つて、代わりに剣を出す。

「スキル、炎牙剣 - 朱咲！」

そう叫ぶと、手に持つた剣が赤く光る。ユウトは剣を敵に右足に突き刺した。

「グア！！！」

短い叫び声。敵のHPゲージが10分の1程減少した。
さつき当たつた矢がほとんどダメージを与えられなかつたのは、相手の防御力のせいではない。単にあれがただの矢だつたからだ。ユウトは、攻撃を終えると、すぐに後ろに後退した。

「あなた アーチャーじゃなかつたの？」

ハルカの顔は驚きに満ちていた。

「ええ フェンサーです。」

初めての共同戦線（2）

マーティンワールドには三つのクラスがある。

物理戦闘が得意な『フェンサー』。

遠距離攻撃が得意な『アーチャー』。

魔術攻撃が得意な『ソーサラー』。

その中で、弓を扱えるのはアーチャーだけだ。

「でも弓を使いこなしてたじやない！」 つてまさか

「俺は現実世界で弓道をやっています。アーチャーではないから、弓系スキルは一つも覚えていないんです」

「それにしてもあの命中率は……」

「自分で言うのもなんんですけど、割と上手いほうなんです。フェンサーは『命中率』の成長率は皆無に近い。だけど、初期値は他のクラスと変わらない。それが加われば、あれくらいの命中率にはなるつてわけです」

ユウトが剣士でありながら、『』を使う理由。それは安全だからだ。剣は近づかないと攻撃できないが、弓はそうではない。雑魚モンスター相手なら、弓の本来の攻撃力だけで十分で、白兵戦よりは危険が減る。

そう説明しながら、剣を構えなおす。

「回復スキルは覚えてますか？」

ハルカに尋ねると「ファースト・エイドだけ」。

ファーストエイドは回復スキルの基本呪文で、ゲージの1割分回復できる。ちなみに、セカンド・エイドの回復量は3割程度だ。

「じゃあもし、HPが半分以下になつたら回復呪文で助けてください

い

「わかった」

と、それを聞くと同時にユウトは駆け出した。

黒長亀が水弾を放つてくる。それをジャンプで避け、そのまま敵

の首を剣で狙う。剣は首のど真ん中を斬り、敵のHPゲージを削つた。

「強化結晶、炎。……強化結晶、炎」

ハルカは、取り出した二つの強化結晶を槍杖の前で碎いた。その後、槍杖の刃に炎の弾が宿る。

「スキル、ブレイズ・エンド！」

弾は敵の首目掛けて一直線に飛び、爆発を引き起す。黒長亀の断末魔は、爆発音にかき消された。

HPゲージは一気に半分以下に減っている。

ターボルタイプにしては防御力が高くない。おそらく攻撃力が高い分、防御力は下がっているのだろう。ユウトはそう予測したと、ユウトが次の攻撃に移ろうとしたときだった。

「グアツ！」

黒長亀の口から水弾が放たれた。ユウトはそれを軽々避けた。だが

着地した次の瞬間、ユウトは大きく吹き飛ばされた。

すぐに姿勢を立て直す。だがすぐに次攻撃。水弾は、さっきまではブランクを置いて撃たれていたが、HPゲージが半分以下になつた途端、次から次へと放たれる。

途端に劣勢に追い込まれる。弾自体は避けられないほどではないが、それでも反撃できるほどの余裕は無かつた。

次の攻撃を避けきる。だが、無理な姿勢のからジャンプしたため、着地に失敗してしまつ。すぐ次の水弾が来る。

避けきれない

そう思つたユウトは、少しでもダメージを抑えようと、剣を体の前に持つてきて盾代わりにした。

水弾が後1メートルの距離に入つたとき、

「ブレイズ・ブレイド！」

ハルカの放つた炎剣が水弾を相殺した。

このままではまずい。

そう直感したユウトは、叫んだ。

「秘奥義！ 新星の射手『レディアント・アーチャー』！」

⋮

5秒後。

ダンジョンのボスは、少しの泣き声も上げず消滅した。

「……どうなつてんのよ」

ハルカはなにが起きたのか、理解できなかつた。

「秘奥義！？ 何で！？ 有り得ない！」

「多分、先輩のお兄さんが俺をギルドに誘つた理由はこれでしきう。レベル20で秘奥義。確かに有り得ないです」

秘奥義。

一撃で勝負を決する、最終奥義。

「説明書に由れば、秘奥義を覚えるのは速くて40、普通は50になるまでは覚えられない。でも俺は違つた。最初から使えたんですね」

「最初から？ そんな馬鹿な。反則も良いといひよ」

「ええ。俺もそう思います」

「あの技は何？」

「レディアント・アーチャー。光りの矢を放つ秘奥義。敵の防御力に関係なく貫通ダメージを与える」

「発動条件は？」

「ありません」

「ない！？ 馬鹿な！ そんな桁外れな技が条件無しなん」

ハルカがあることに気がついて、口を閉じた。

目線はユウトの頭上。

「HPが残り1？」

「そう。ユウトのHPゲージはレッドカラーに変わり、そこには1という数字が刻まれていた。」

「はい。発動条件は無い。でも発動には代償が必要なんです。発動すると、HPを1だけ残し、残り全てを消費してしまいます。消費したHPの分だけ威力は高くなる」

「1だけ残すって……」

「そうです。迂闊には使えない。もしすこしども攻撃されればそれで死んでしまう。そんな自爆技なんです。さつきは後先考えずに使つてしましましたけどね」

「それにしても最初から秘奥義を覚えているなんて。兄さんはコレを知つてて」

「多分そういうことでしょう。だつて俺よりレベルが高い奴だつているわけだし」

「そういいながら、コウトは回復結晶を取り出した。HPが3割回復する。

「HP1でモンスターに襲われたらシャレにならない じゃあ帰りましょうか」

「転移ポイントから、ダンジョン入り口に戻る。すると、そこにはアリスが立っていた。

「アリス？ どうし」

「声を掛けたハルカがすぐに異変に気がつく。そこに立っている少女の体は半透明だつた。

5・偽者と別れ（1）

「ア……リス？」

半透明なその姿は、まるでレンズ越しに見える虚像。ハルカは手を伸ばしてアリスを掴もうとする だが、その手が何一つ掴むことは無かつた。

「もう、この姿も持たない。当然よね。元々本物じゃないんだもの。今まで残つて入れただけでも感謝しないと……」

「な、どうなつてのよ！ ちよつと！」

ハルカは激しく動搖した。

「ハルカ。今までありがとう。私は今日で居なくなっちゃうけど、本物の私が生きてる。だからね、悲しまなくていいよ？ それから、ユウト君。これからハルカちゃんをお願いね」

「アリス！？ なに、消えるってどういうことよ！？ そんな話聞いてないわよ！」

「うん……ごめんね」

アリスの目から大粒の涙が零れ落ちる。だが、それは実体を持たない、ただの映像にせものだつた。

徐々にあり巣の透明度が増す。

その体を掴もうと手を何度も何度も行き来させるハルカ。それが可愛そうで、思わずその腕を止める。

「やだ……やだ……離してよー！」

「最後の言葉くらい聞いてやつたからどうですー！」

「」

もうアリスの体は、散々水で薄めた白色絵の具のような色になっていた。

「ハルカ。今まで本当にありがとうございました。本当に………」

やがて聞こえるのはハルカの泣き声になつた。声を出すことが出来なくなつて尚、アリスはまだハルカにお礼の言葉を言い続けた。
そして、それも無くなり、その場には2人だけが残された。

：

彼女が泣き止んだのは、あれから1時間以上経つた頃だった。

「どこです家は？ 送りますよ」

「いいわよ別に。どうせログインポイントが違うんだから、別々の場所に戻るでしょ」

「……そうですか」

「兄さんに、事情を聞いてくる。それじゃ」

：

それから三日後の昼休み。

体躯の後、教室に帰ると、机に1枚の紙が置いてあつた。女の子らしい可愛いメモ用紙に『昼休み、中庭に 晴佳』とだけ書かれたメモが置かれていた。

優斗はメモを手に取つて教室を出た。

：

「三日ぶりですね、先輩」

「そうね」

優斗には話題が無いので、晴佳が喋りだすのを待つ。

「聞いたわ。やっぱり兄さんは全部知つてた」

「……そうですか」

「でね、本人に会つてきたわ」

「え？」

「ベッドに横たわってる本人よ。もう半年昏睡状態が続いてるって

半年前 ちょうど『ミラージュ・ワールド』が始まった頃だ。
「とりあえず次のダンジョンが現れたらまたようしく。言いたかったのはそれだけ」

そういうて、中庭を出ようとすると晴佳。だが、突然立ち止まり、優斗のほうに振り返った。

「ああいうとき、男は黙つて抱きしめてくれるものじゃないの？」

「……え？」

「泣いてる女の子が居たら抱きしめるのが普通でしょ。あんたホントに男？」

とそれだけ言つて立ち去つていった。

「……」

いや、そりやか。迷つたよ。

でもさ、どうかとに紛れて、そんなことじつ良いかどうかなんて分からぬし。

「わかったよ。次からは遠慮なくそうする
誰も居ない中庭で、優斗は一人呟いた。

偽者と別れ（2）

部活が終わり電車通学の友達達と別れ、一人遊歩道を歩いていると、突然声を掛けられた。

「コウト君」

「え？」

振り向くと、そこには若い男の姿があった。年齢は20代前後だろうか。茶色の髪と整った顔が特徴的だ。アイドルといわれてもなんら違和感はない、今時につっこいい男だった。

「誰ですか？」

「創也だ。苗字は中北」

「中北……中北晴佳の兄？」

「その通り」

「あなたが月姫の剣の」

「まあな。一応挨拶をしておこうと思つてな」

「……二つ聞きたいことがあります」

「何だ？」

「何故、俺たちだけをC地区のダンジョンに送つたんですか？　自分の妹を危険に晒したんですね？　せめてあなたが付いてくれれば楽勝でしょう」

「愚問だな。それを甘やかしというのだ。それに倒せない敵ではなかつただろう？」

「……もう一つ。何故、貴方はダンジョンの攻略を　ゲームクリアを目指しているんですか？」

「はは。理由、か。そうだな理由といつ理由はない。あえて言えばこれが『ゲーム』だからだから」「遊び感覚……なんですか？」

もしそうだとしたら。コウトは絶対にギルドになど入らないし、

協力もしない。「まあそんなものだ。別に人助けを使用と思つてやるわけじゃない。ゲームをクリアすることが結果的に人助けになる、というだけのことだ」

「……」

「俺は攻略できないものなどないと思つていてる。何故か。攻略できなければそれはゲームではないからだ。君も説明書は読んだだろう? 明確に書かれている。『ミラージュワールドはゲーム』だと」「君は、そんな軽い気持ちで命を賭けるのかと思つてているかもしだれないが……」

優斗は心中で動搖した。考えていることを読まれたからだ。
「命を賭けるという行為は等しくすばらしいことだ。その対象が何であるかは関係ない。まあ君には理解できないかもしだれないが」「そうですね。理解できません」

「だが、優斗君には私達の力が必要ではないかな? 弟さんを守りたいのだろう? 一人でこの先も戦っていくというのなら止めはしないが、オススメはしない。一人にできることなど限られている。だから人間は協力するのだ」

「……」

「ではまたな。晴佳のことだが、気にかけてやつてくれると助かる」
そう言つてから創也は優斗に背中を向けた。

⋮

優斗は、晴佳に以前から気になつていたことを聞いてみた。

「何故、エンディング(ゲームクリア)を目指すんですか」
彼女はその問いに、すこし答えにくそうにしていた。

「単に私は正義の味方、ヒーローになりたかつただけなの。小さい頃にね、私両親が居ないからって、虐められてたことがあったの。そのときには、ある男の子が助けてくれたのよ。『自分は正義の味方だ!』ってね。それから、自分も正義の味方になりたいなつて思

い出しのたの」

それを聞いて優斗は、両親が死ぬ前までは、そんなことを思つていたことを思い出した。

「私思うんだけど、優斗も小さい頃そう思つてたんじゃない？」
「え？」

「正義の味方になりたいって思つてなかつた？」

「……そんな時期もあつたかも知れませんね」

「絶対あつたでしょ。私分かるもん。優斗は小さい頃正義の味方に憧れていた。そして正義の味方だつた」

「何です？ 何でそう思つんですか？」

「さあー。それは秘密」

「……」

「そうね。でも答えは優斗の中にあるかもよ？ あなたが覚えていないだけで」

晴佳は、につこりと笑つていつた。

思えばそれが、優斗が初めて見た彼女の笑顔だったのかもしけない。

あとがき。

こんなにちは。姫反アロです。

この作品は、最近流行の「デスゲーム」をイメージして作りましたが、結局、「ゲームオーバー」死という設定はなくすることになりました。

一応本編では「死ぬこともある」とは書きましたが、ゲーム内の死=現実での死ではない、という設定が（2）で明かされる予定です。

その代わりに、「ゲーム内での死」が軽く扱われることはないよう。（2）では「記憶を失う」という設定を設けています。

（2）ではこの設定を使っていこうと思っています。

さて、解説はともかく。

デスゲームといえば。

キラークイーン（PC版はR18、PS2版はR17）というゲーム。この作品を書こうと思ったきっかけでもあります。

主人公とヒロインは殺しあわねば生き残れない　そういう絶望的な状況からどう抜け出すか、これは物語で一番燃える展開ではないでしょうか。

自分もいつか、絶体絶命からのどんぐり返しを描きたいものです。

毎日100人以上の人気が来てくれてるのは執筆の励みになります。無論、コメントも。

ただ、やはり勢いで書いた感はぬぐいきれないなく、ミスも目立つてゐるでしょ。」

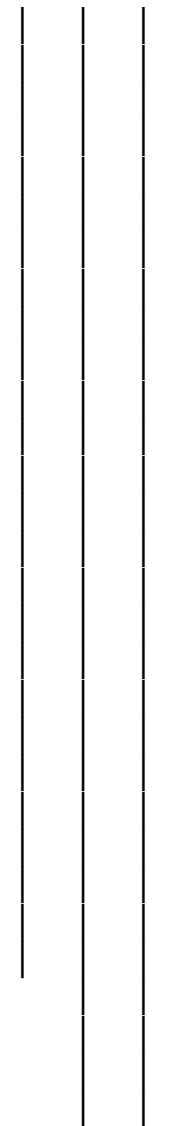
「この辺を少しづつ改稿していくつもりでいます。

では、この作品を読んでくれてありがとうございました。
もしできれば、一言でもかまいません、コメントを残してくれれば嬉しいです。

無論、そういうのが苦手、と言う人はアクセスしてくれるだけで
かまいません。それも励みになります。
では、またどこかで。

09/06/27 (土) 姫戻アロ

弓道場。
くだらない。



PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2282h/>

ミラージュ・ワールド(1) 幻想のアリス

2010年11月11日07時48分発行